

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する中学1年のA生徒に関する合理的配慮の事例

1. 事例の概要

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する中学1年のA生徒について、通常の学級の中で特別支援学級担任や合理的配慮協力員が連携してできる支援についてまとめた事例である。A生徒は、小学2年から特別支援学級に在籍しており、コミュニケーションの取り方や認知面に課題があり、対人関係における社会的適応力や体験不足による適応の困難さが認められる。これまでに専門的な機関で発達検査を受けたことはないが、支援学級担任が保護者と連携して指導・支援を行っている。特に、新しいことへの取組に対して、A生徒の負担を軽減しながら、経験を増やしていくことに取り組んだ。

合理的配慮協力員は、A生徒に対して、定期的に観察と的確な助言や支援を行っている。授業の様子や実態をその都度、学級担任や支援員と情報共有して記録を残し、定期的に支援の方法を検討する会議を開いている。

キーワード 情緒障害、コミュニケーション、通常の学級、教科指導、
スモールステップ、ユニバーサルデザイン

2. 児童の実態

A生徒はB中学校の特別支援学級に在籍していて、学習全般に遅れがある。新しいことに対する不安がとても強く、慣れるまでに時間がかかる。また、自分が納得しないことは、頑なに拒否する。人間関係においては、自分の気持ちや伝えたいことを言葉で表現することがうまくできず、周りとのコミュニケーションが取りにくい。

部活動は吹奏楽部に所属しているが、手先を動かすことが苦手で、楽器がうまく吹けなくて泣くこともあるが、真面目に参加している。楽器の練習を続けることで、少しずつ曲が演奏できるようになってきた。英語の発音練習では、友達とペアで単語や英文を何度も練習し、教科書の英文は読めるようになっている。簡単なリスニングも聞き取ることができ、英検5級に合格した。水泳・柔道・スキー等は苦手意識が強いいため、固まってしまう。友人とのコミュニケーションをうまくとることに課題があるため、班やグループ学習ではうまく入っていくことができない場面が見られる。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B中学校のあるC町は、地域小中高一貫教育・連携型中高一貫教育を実施しており「個別の教育支援計画及び個別の指導計画」の書式も12年間を見通したものとなっている。各校の特別支援教育コーディネーターで特別支援教育研究会を開催し、児童生徒理解に努めている。【基礎1】
- 都道府県教育委員会の「特別支援学校教育職員免許法認定講習」を受講し、特別支援学校の免許状の取得に努めている。また、研修の企画や外部の専門家（大学教授・LDセンターの職員等）を招いて助言をいただく機会を設けている。【基礎2】
- 作業療法士、理学療法士、言語聴覚士を月1回招聘している。1人1時間程度で

あるが、専門家と連携し指導にあたることで、教員の専門性を高めることにつながっている。また、専門性のあるD特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが生徒の様子を参観し、支援の方策を助言する相談会を行っている。【基礎6】

4. 合意形成のプロセス

小学校からの「個別の教育支援計画及び個別の指導計画」をベースに、B中学校で行える支援について、A生徒、保護者と丁寧に話し合いを重ねた。特に中学校からは、通常の学級の授業においては教科担任制となり、複数の教員と関わることで、A生徒の負担が増えないか、特別支援学級担任や支援員はどこまで、こういった形で支援を行うか、A生徒、保護者の希望と各教科の進め方等を考慮して、授業を進めながら検討していった。支援内容は、合理的配慮協力員の意見も考慮して、校内支援委員会を開催し、決定した。その後、支援や配慮の詳細について、保護者と合意形成に望んだ。

5. 合理的配慮の実際

- これまでの経験が少なく実技をとまなうことに対しては、理解できても動けないで固まってしまうことがある。美術の課題における、作業量の軽減や、音楽でのスモールステップでのアルトリコーダーの指導等、調整をする。【合理①-1-2】
- 2泊3日のスキー実習では、初めてのスキーに不安も大きいため、特別支援学級担任と一緒に単独でインストラクターに指導してもらう機会を設ける。スモールステップで成功体験を積み重ねられるようにする。【合理①-2-2】
- コミュニケーションの取り方を場面に応じて指導していく。「そういう時は『私は〇〇と思うから、もう一度〇〇してくれる?』という言い方もできるよ」等、具体的に言い方を伝えるようにする。また、怒りのコントロールができるよう適切な表現を考えられるようにしていく。【合理①-2-3】

6. 本事例の成果と課題

大型テレビの活用等、視覚化することで学習がしやすくなり、「提出物チェック表」を用いることで提出物が期限に間に合うことが多くなり、忘れ物も徐々に減って達成感を持てるようになった。部活動では何度も失敗するなかで「部活動をやめたい」と訴えてきたが、担任との話し合いを重ねることで思い直し、自ら継続することを決めた。A生徒の真面目さもあり、根気強く楽器の練習を続けることで、少しずつではあるが、曲が演奏できるようになり、笑顔が見られるようになってきた。また、部活動の欠席連絡等が自分でできるようにもなってきた。友人とのコミュニケーションには課題がまだあるが、複数の教員とのやりとりの中で、内容を掘り下げて表現方法を増やすようにしている。

全教職員がA生徒を意識した授業づくりを考えることで、視覚に訴える教材の提示や授業のユニバーサルデザイン化をはじめ、学習めあての提示や学習内容のルーティーン化・グループワークの導入等授業改善の取組が進んだ。今後、さらにこの取組を進めて、充実させていくことが課題である。